

## 書評

## 地球破壊の張本人

著者：石田 寛  
 発行：ミオシン出版  
 定価：1,600円（本体価格）  
 評者：中村泰人（京都大学工学研究科教授）

著者は通産省に永らく勤めて得た知識と経験を基に、最近まで省エネルギーセンターの責任者として活躍されてきた方である。刺激的な標題とは裏腹に、行政側にかたよることなく、民間の企業と個人の役割について真面目に取り組み、やさしく表現しようという姿勢が見てとれる。

全六章からなっていて、第一章では「便利さの幸せを考える」で、大量消費社会の実態を紹介し、消費者が主役の社会へ向けて、官民の分担と個人の役割に触れた導入部である。第二章は「地球は大変動している」で、標題ほどには激しい内容ではなく、地球の温暖化について説明し、将来の人口爆発から資源・エネルギーの重要性を指摘している。

第三章「生活を変えて地球環境改善」は頁数もち

ばん多く、著者が力をいれたところと思われる。エネルギー消費をライフサイクルの観点から考える必要性を説き、生活の中での無駄の発見から省エネを講じて、七割の世帯の参加があれば地球は守られる、としている。第四章は一転して「地球環境問題と企業経営」で、産業分野での地球環境問題と省エネルギーを扱っている。エネルギー消費の原単位低減の進め方がいろいろ紹介されているが、ここは著者の独壇場であろう。

第五章は「社会の変化を先取り」、第六章は「いま、地球好転のチャンス」で、市民の力による消費行動の変化が企業を変え、個性的なライフスタイルが社会を変えて、エネルギー軽量型社会が実現する、としている。

その主張は、著者の言を借りれば、「みんなの意識と行動力が長期的に続きさえすれば、個々の企業と個人の行動を集結させることは、手法として有効なものである。どれだけの人と企業が意識を持ち、行動して力を結集できるかが問題の帰結を左右する。」ということである。

しかし、意識を持つ手がかりが知りたいところだが、それはしないものねだりだろうか。

## 書評

## ごみ問題をどうするか

一廃棄・処理・リサイクル  
 岩波ブックレットNo. 440

著者：森下 研  
 発行：岩波書店  
 定価：400円（本体価格）  
 評者：吉田英生（東京工業大学工学部助教授）

最初に目がとまる本書の見返しには、「1994年度の47都道府県のごみ（一般廃棄物）処理」と題する表が掲載されている。一般廃棄物は全国で1年間に約5000万トン（東京ドーム136杯分）、国民一人あたり毎日1.1kgに及ぶ。

今さら言われるまでもなく、ごみ問題の深刻さは現代人に共通して認識されているであろう。しかし、その対処法の3本柱、すなわち本書の副題にもあるように、廃棄・処理・リサイクルに関し、一般の人々がどれほど正しい知識を持ち合わせているかという、はなはだ疑わしいのではないだろうか。正直なところ、評者の場合はほとんど無知であった。しかし、本書を一読した後は、ポイントはほぼ把握したといっても過

言ではない。

著者の森下氏は技術者ではなく、政治学科出身である。したがって、本書は、主に社会学・社会システムとしての視点から、ごみ問題が扱われている。全64ページの小冊子は、25節に分けられ、一般的な導入事項、法体系、ドイツやフランスでの事例、各種物資のリサイクル、ダイオキシン問題、埋め立て処分場等、ごみ問題に関するポイントは網羅されている。

著者もあとがきの中で述べているように、ごみ問題を「どうするか」というよりは「どうなっているか」に紙面の多くをさいているのは事実である。しかし、正確な認識こそ議論の出発点であり、さらに小冊子という性格からしても、内容の取捨選択は適切であるといえよう。引用されたデータは最新のものであり、図中にも重要な情報がまとめられているのは重宝である。ごみ問題を考えるとき、必要に応じて関連する節を参照するデータブックとしての使い方もできよう。

分量・価格とも手頃で、本学会の会員から、一般の人々、さらには大学や高校での社会教材として有益である。万人が例外なく排出しているごみについて考えるための好著として、一読を強くお勧めする。